

『新靈枢』が伝えた日本経由の西洋解剖学とその用語

松本秀士

提要：丁福保是位近代中国著名的内科医师，还自己开设书局，并出版了较多的汉译日文医学书。他所编译的《新灵枢》为中国最初期的日本之西洋解剖生理卫生书。此书上可以看到当时日本常用的解剖生理学术语。本搞通过分析其解剖学内容和解剖学术语，来探讨此书之医学史上的意义。

0. はじめに

西洋医学は人体解剖学をその基盤におきながら、その発展の歴史を刻んできたことは周知の通りである。西洋医学が重んじてきた人体解剖学では、すでに生命を失った人体を対象にして、その構造を執刀を交えながら漏らすことなく隅々まで観察し、そこで得られた事実を客観的に論述していくことが尊ばれてきた。従って、人体に起こる生命現象のメカニズムについては、人体解剖学ではなく生理学という別の分野が担ってきた。もちろん、生理学も人体解剖学で得られた人体構造に関する客観的知識は必要不可欠であることはいうまでもないことであろう。

一方、中国伝統医学は全く独自の医学の歴史を刻んできたが、西洋の人体解剖学のように、執刀により人体構造を遍く追求しようとする学問体系を形成してこなかった。もちろん「解剖」という語が『靈枢』にみられるのをはじめ¹、五臓六腑を中心とする断片的な解剖図も歴代の中国伝統の医書の中に描かれてきており、中国伝統医学においても人体解剖を行っていたという形跡は認められる。王清任の著した『医林改錯』では中国伝統医学で曖昧に描写されてきた人体解剖に対して追求の目が向けられ、従来の臟腑図から一步前進した解剖図の記録を残している。しかし、『医林改錯』でのより大きな目的は、漢方薬の効果的な処方にあり、多くの処方をもそこに残している。つまり、王清任は人体解剖の純粋な追求ではなく、中国伝統医学において五行説に帰納させながら論じられてきた解剖学的誤謬を改めることを通して、五行説に帰納させながら論じられていた漢方薬の処方を改めることにあったのである²。

王清任の後には、来華医療宣教師によって西洋の人体解剖学が伝わってくる。英国人来華医療宣教師ホブソン (Benjamin Hobson 1816~1873 中国名；合信) が編訳した『全体新論』(1851)

は、西洋の自然科学の気風を解剖生理学的論点でまとめられた教養書であり³、同書をはじめとして、米国人来華医療宣教師オスグッド (Dauphin William Osgood 1845~1880 中国名 ; 柯為良) らが編訳した人体解剖学の専門書『全体闡微』(1881)、および英国人來華医療宣教師ダッジョン (John Dudgeon 1837~1901 中国名 ; 徳貞) が編訳した人体解剖学の専門書『全体通考』(1886) 等は、当時の英国で最も権威をもった解剖学者グレイ (Henry Gray 1825~1861) が著した人体解剖学の専門書 “Anatomy, descriptive and surgical” をベースに編訳されており (後述)、そうした中国伝統医学の流れに対して、客観的かつ純粋に人体構造のみを捉えていくという全く新たな人体観を中国に伝えたという意義がある。

中国伝統医学の流れの中で、そうした西洋医学の伝播に対して、これをいち早く参照した一派を「中西医匯通派」と呼称している。中西医匯通派は主に西洋の人体解剖学、あるいは生理学に着目していた。その中でもとくに、精妙に描かれる人体解剖図を評価してこれを受容し、中国伝統医学の枠組みの中で描かれてきた従来の臟腑図との入れ替えを行った。そこで注意したいことは、西洋の人体解剖学を根本から受容したのではなく、中国伝統の医学体系を基盤とした中体西用を主旨とするものであり、中西医匯通派は西洋独自の人体観による解剖学を受容したわけではなかった⁴。従って、近代中国においては、来華医療宣教師によって西洋の人体解剖学が伝えられていった一方で、中国伝統医学の枠組みの中で、西洋の人体解剖図の表面的利用程度の理解にとどまる西洋医学の受容という大きな二つの流れが存在したことがわかる。

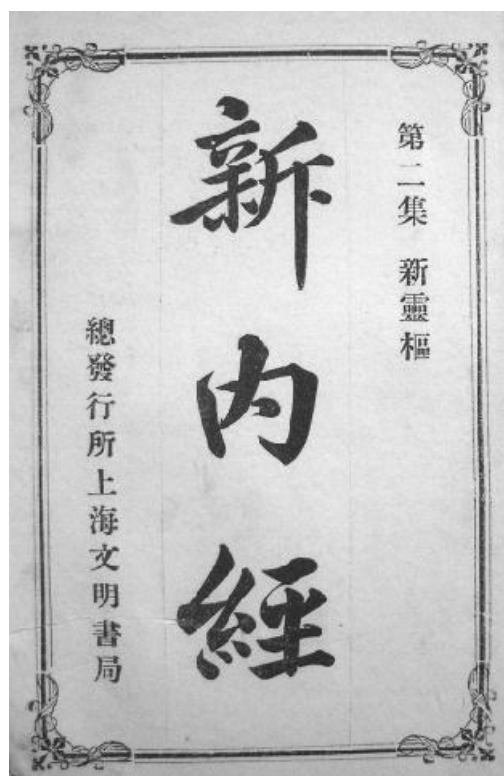
辛亥革命直前には、明らかにそれらとは異なる西洋の人体解剖学伝播の流れがみられる。その筆頭には丁福保の編纂した『新靈枢』(1908) があげられる。同書は西洋の人体解剖学を一定の体系をもって伝えたものであると同時に、はじめて和製漢語による解剖学用語を一定の体系をもって伝える役割を果たしている。加えて中国伝統医学で断片的に論じられてきた人体解剖学的記述をいくつか取り上げ、その正誤を検討している。書名は中国伝統医学の経典『靈枢』を冠しているが、明らかに中体西用を脱した医学書である。

これまで拙稿 (2008c, 2009a, 2009c) ではそのごく一部分に触れてきたが、本稿では近代中国における西洋の人体解剖学伝播の流れを踏まえた上で、『新靈枢』で用いられた主な和製解剖学用語を検討しながら、同書の意義を明らかにしたい。

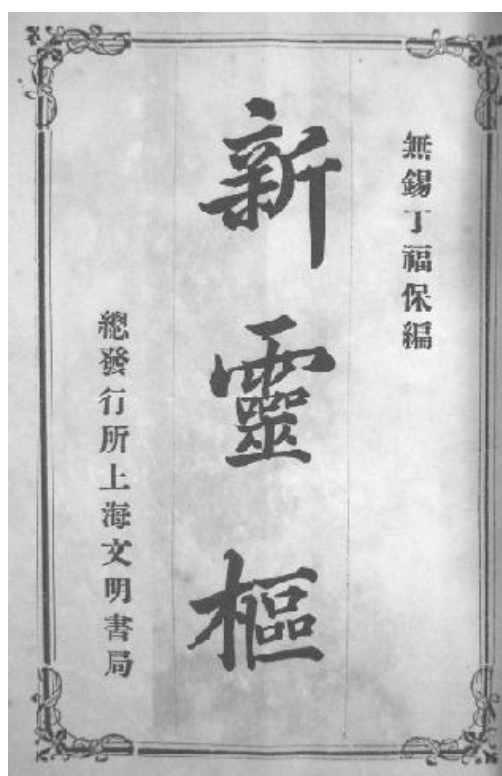
1. 丁福保と『新靈枢』の概要

丁福保 (1874~1952) は、江南製造局翻訳館で主に西洋医学・科学書の翻訳に携わった趙元益 (1840~1902) に医学の手ほどきを受けた上で、自らも江南製造局工芸学堂に入り、西洋化学を学び (1901)、同年には上海に設立された東文学堂にも入って日本語を学び、翌年には文明

書局を組織し、日本の文典の翻訳に取り組んでいる⁵。後に京師大学堂に招聘され、訳学館で算学と生理学の教習を務める(1903~1905)⁶。その後、上海において丁氏医院を開業するが(1908)、法改定のため公署が必要となり、翌年に南京督院に赴いて医科考試を受けると、最優等内科医士の証書を獲得(1909)、それと同時に、日本医学専員に抜擢され日本へ派遣される(1909)⁷。日本に赴いた丁福保は、当時の東京帝國大学の教授を務めた二村領次郎(1875~1928)の指導の下、それまでの日本の医学の状況を調査する(1909)⁸。また、前後には上海文明書局、あるいは上海医学書局から『丁氏医学叢書』として各種医学書類を次々と刊行する。この叢書の一編として著されたのが『新内経』(1908)で、第一集『新素問』、第二集『新靈樞』の構成としている。



『新靈樞』表紙



『新靈樞』扉

第一集『新素問』は中国伝統医学の經典の一つ『素問』を冠しているが、序において中国伝統医学の歴史に触れてはいるものの、具体的に『素問』の内容を扱ってはならず、近代的な西洋の衛生的内容を人の寿命を焦点に、たとえば飲食、日常のサニタリー、各種疾病予防、睡眠、あるいは精神衛生等を概説している。そして、そのこ

とを通して中国に近代的な西洋の衛生概念を伝えようとした意図が伺える。『素問』ではたとえば上古天真論第一等に養生に関する論述がみられるものの、『新素問』においてはこうした伝統の養生との比較検討といった意図はみられず、『素問』との直接的関係は伺えない。

一方、第二集『新靈枢』では西洋の近代的な解剖学を中心にして、生理衛生的内容がまとめられているばかりでなく、『素問』『靈枢』等の中国伝統医学の經典にあるいくつかの経文が比較検討の対象としてとりあげられている。

本文中には括弧書きではあるが、たとえば(アメーバ運動)等のようにいくつかのカタカナ語が記されていることも一つの特徴であるが、最大の特徴は和製解剖学用語を全面に用いていることである。それまで来華医療宣教師が刊行してきた中国語による西洋医学書等で用いられていた訳語についてみると、まず、第一章 細胞篇に「脳髓及全体脳気筋。其総名曰神経。所以為神経之原質者。曰神経細胞」とあり、『全体新論』(1851)等のホブソンによる書で使われた *nerve* に対する中国語訳「脳気筋」を「神経」の呼称とすることを断っている。また、第九章 消化器解剖篇には「案腺者。分泌特異之物質之機器也。旧訳作核…凡儲存液汁之囊皆曰腺」とあるように、それまで来華医療宣教師が用いてきた *gland* に対する中国語訳「核」を「腺」とすることを断っている。しかし、*pancreas* に対しては、それまで来華医療宣教師が用いてきた「甜肉」については触れず、中国伝統の流れでみいだしてきた「胰」が「脾臟」に当たるとして、「脾臟」または「脾」をその訳語として用いている。

丁福保が後に翻訳した人体解剖学の専門書『新撰解剖学講義』(1909)の緒言では、オスグッドらが編訳した人体解剖学の専門書『全体闡微』(1881)等、来華医療宣教師が編訳した人体解剖学書の名があがっており、丁福保がそれらで用いられた中国語解剖学用語をある程度把握していたことが伺われる。しかし、『新靈枢』においてはそこで使用した「細胞 (*cell*)」「筋肉 (*muscle*)」⁹「動脈 (*artery*)」「静脈 (*vein*)」等の和製解剖学用語については、それまで来華医療宣教師らが用いてきた中国語解剖学用語との異同に言及していない。『全体闡微』(1881)は当時の多数の来華医療宣教師たちによる統一した意図で編訳されたはじめての人体解剖学の専門書であるばかりでなく、巻末に英文との対訳表というかたちで中国語解剖学用語を示すことによって、中国語解剖学用語の標準化という役割を担った書でもある。『新靈枢』で用いられたそれらの和製解剖学用語は、『全体闡微』(1881)で定められた中国語解剖学用語によるとそれぞれ順に「珠」「肌肉」「核」「脈管」「回管」である¹⁰。以下、それらの解剖学用語を焦点に『新内経』が伝えた西洋解剖学の様相を検討していく。

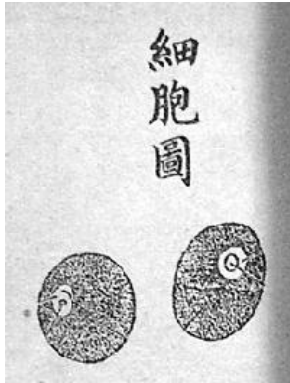
2. 『新靈枢』にみる細胞学的記述

『新靈枢』は第一章を細胞篇とする章編成をもち、このことは同書の一つの大きな特徴である。細胞を生命の最小単位とする細胞説をはじめて提唱したのは周知の通り、植物についてはシュライデン（Matthias Schleiden, 1804～1881, 独, 1838）、動物についてはシュワン（Theodor Schwann, 1810～1882, 独, 1839）であり¹¹、人体解剖学書において細胞学に関する内容を明確に盛り込むことが一般的になるのは19世紀後半頃のこととなる。中国に最も影響のあるグレイの人体解剖学書では、初版（1858）では細胞学に関する内容を盛り込んだ章はないが、第五版（1869）以降でははじめの章に盛り込まれている。そうした構成内容の違い等から、オスグッドらによる人体解剖学の専門書『全体闡微』（1881）がもとにしたグレイの人体解剖学書は第七版（1875）～第八版（1877）であり、ダッジョンによる人体解剖学の専門書『全体通考』（1886）では第一版（1858）から少なくとも第四版（1865）に基づくものであることがわかる¹²。つまり、中国における西洋の人体解剖学伝播において、生命の最小単位である細胞学から掘り下げた内容を最初に伝える役割を果たしたのは『全体闡微』（1881）となる。

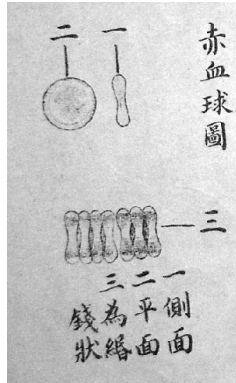
『新靈枢』は人体解剖学だけでなく生理学・衛生学の内容を盛り込んでおり、純粋な人体解剖学の専門書ではないが、そうした当時の西洋の人体解剖学の新たな流れにみられる細胞学に関する内容を備えたものであることがわかる。しかも『新靈枢』では和製解剖学用語を全面に用いており、日本経由で西洋の人体解剖学を伝えた最初期の医学書であることに大きな意義があるといえる。そうしたことから、以下に『新靈枢』で用いられた細胞学に関する語彙を示したい。

細胞 細胞質 細胞核 細胞膜 無色血液細胞 有色血液細胞 赤血球 白血球
 淋巴細胞 上皮細胞 内皮細胞 色素細胞 腺細胞 脂肪細胞 軟骨細胞 骨細胞
 筋細胞 神経細胞

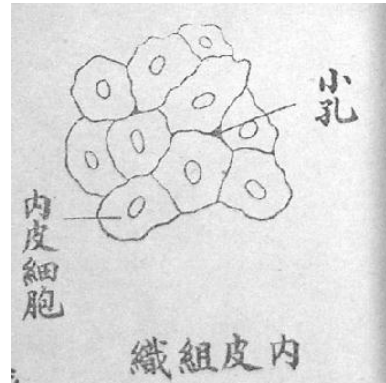
上記語彙のうち、はじめの四つは細胞の構造に関するものであり、その具体的内容についてもごく概説にとどまり、必ずしも細胞が生命の最小単位であることを明確には論じていないことには注意が必要である。以下に同書に掲載された「細胞図」を示すが、この図もごく概略を伝えたものであり、上記語彙の細胞質・細胞核・細胞膜を具体的に図示していない。他の各種細胞についても、具体的に図示されるのは「白血球」「赤血球」「内皮細胞」「色素細胞」「軟骨細胞」にとどまり（「赤血球」「内皮細胞」の各図については以下に示す）、それらのごく概略が紹介される程度である。



「細胞図」



「赤血球圖」



内皮組織の図に示される「内皮細胞」

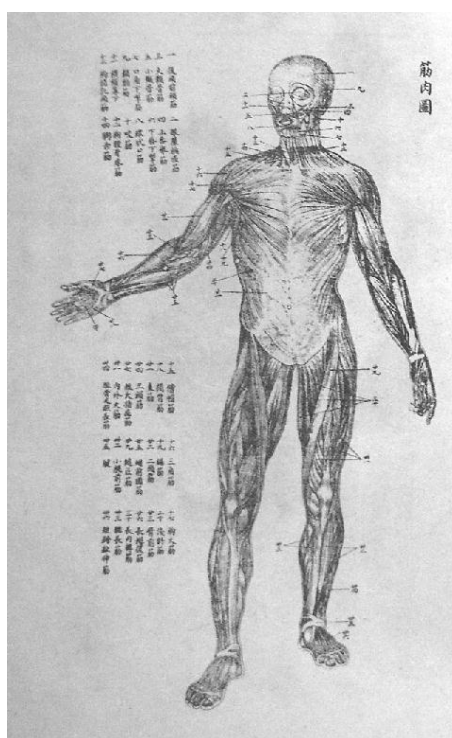
3. 『新靈枢』で伝えられる筋系の和製解剖学用語

ホブソンの編訳した『全体新論』（1851）において、西洋解剖学の独自の流れの中で導き出されてきた *nerve* という概念は、「脳気筋」「脳筋」「気筋」等の中国語訳を用いて概説されていた。そして、*nerve* に対する中国語解剖学用語は『全体闡微』（1881）によって正式に「脳筋」と定められている。「筋」という語を語構成にもつ「脳筋」という訳語は、西洋解剖学が人体を張り巡らす筋状の構造物の中から *nerve* をみいだしてきたことを反映したものであった¹³。そして、*muscle* に対して「肌」、*tendon* に対して「肌筋」、*ligament* に対して「骨筋」をそれぞれ中国語解剖学用語として定めているように、用語相互間をみても体系だったものが示されていた¹⁴。

その当時の和製解剖学用語をみると、*nerve* に対しては「神経」、*muscle* に対しては「筋」または「筋肉」であり、*tendon* に対しては「腱」、*ligament* に対しては「靭帯」が用いられている。『新靈枢』ではそれらを踏襲するものであり、とくに「筋肉」に関しては各筋の名称に対して「一筋」を接尾語とする一連の和製解剖学用語が用いられている。以下に、同書で用いられた一連の筋系の用語を列記する。

随意筋 不随意筋 横紋筋 平滑筋 後頭前頭筋 眼廉輪匝筋 大顳骨筋
 上唇挙筋 小顳骨筋 下唇下制筋 口角下制筋 環状口筋 顛顳筋 咬筋
 横鎖鼻下筋 胸膛牙床筋 胸鎖乳頭筋 胸舌筋 僧帽筋 三角筋 胸大筋
 闊背筋 鋸筋 浅斜筋 直筋 二頭筋 臂前筋 三頭筋 廻前圓筋 長廻後筋
 短大指屈筋 縫匠筋 長内転筋 内外大筋 小腿前筋 腓長筋 腓骨足蹠長筋
 腱 短踇趾伸筋

上記の用語のうち、はじめの4つを除いた36の筋は、「筋肉図」を掲載することで図示された人体の各筋群であるが、決して筋系の全容を網羅したものではない。ホブソンの編纂した医学語彙集『医学英華字釈』（1858）では23、オスグッドらの編訳した人体解剖学の専門書『全体闡微』（1881）では310であるから¹⁵、『新靈枢』の「筋肉図」で図示された36という数は、およその概略を示したものであることがわかる。また、たとえば「後頭前頭筋」は後頭筋と前頭筋を、「短踵趾伸筋」は短踵伸筋と短趾伸筋をそれぞれ併せた表記であり、この点においてもおよその概略を示す主旨のものであることがわかる。以下には、『新靈枢』に掲載される「筋肉図」を示しておく。なお、同書では、腱については、「腱」の語だけを示すのみであり、靭帯についても「靭帯維持骨之位置、使不相乖離」とあるように若干の説明をするのみであり、人体各部位にある個々の「腱」「靭帯」については、図示も言及もしていない。



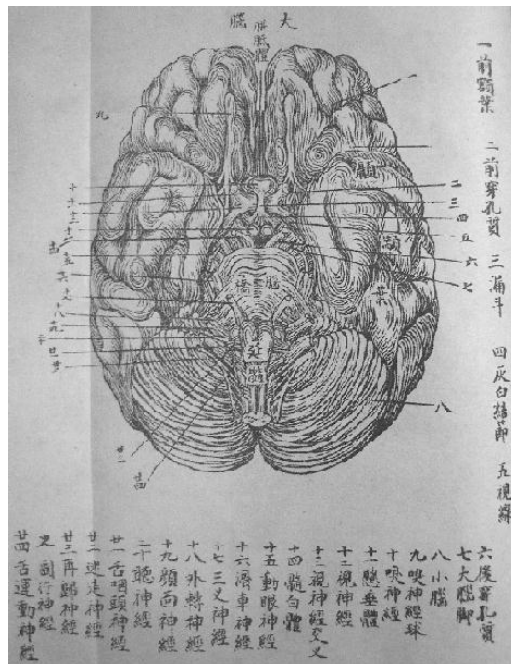
「筋肉図」

4. 『新靈枢』で伝えられる神経系の和製解剖学用語

中国伝統医学、あるいは日本の漢方医学独自の流れの中においては、明確に神経系の概念をみいだすことはなかったことから、とくに神経系の概念の日中両国への伝播は重要であり、次に『新靈枢』における神経系の記述についてみていきたい。同書では第十七章 神経系解剖篇

において、体系的にそれが伝えられている。この章では「神経系」の概要、および個々の「脳神経」についての詳細な論述と図示がある。「神経系」の概要では、まず「脳脊髄系」の神経と「交感神経」との区分に言及している。次に「脳」と「脊髄」の区分を概説した上で、「大脳」「小脳」「橋」「延髄」、および「脊髄」を概説している。「脳神経」については、十二対の「脳神経」を概説した上で、脳底に関する解剖図を用いながら、十二対の一部を示している。『全体新論』（1851）で脳神経は当時としてはすでに旧説である九対を伝えていた。そして、中国にはじめて新説による脳神経十二対を伝える役割を果たしたのは『全体闡微』（1881）であったが、『全体通考』（1886）では新説に基づく各脳神経十二対に触れてはいるものの、数え方は旧説の九対を採用していた¹⁶。つまり、そうした背景を踏まえれば、『新霊枢』が確実に新説による脳神経十二対を伝えたことには一定の意義がある。以下には同書が伝えた脳神経十二対の各用語を列記するとともに、同書に掲載される脳底を表す図を示す。

嗅神経 視神経 動眼神経 滑車神経 三叉神経 外旋神経 顔面神経 聴神経
舌咽神経 迷走神経 副神経 舌下神経



脳底を表す図

「脊髄神経」「交感神経」の両者については、詳細な記述や解剖図はみられない。また、感覚

神経・運動神経、随意神経・不随意神経といった神経の生理的機能分類を示す用語はみられない。以上でカギ括弧書きの用語は『新靈枢』で用いられる神経系の用語の一部である。

5. 『新靈枢』で伝えられた血管系の和製解剖学用語

次に『新靈枢』における血管系に関する記述をみると、artery（動脈）に対して「動脈管」「動脈」、vein（静脈）に対して「静脈管」「静脈」、blood vessel（血管一般）に対しては「血管」をそれぞれの訳語として用いながら、第十一章 循環器解剖篇、および第十二章 循環器生理衛生篇の中で動脈・静脈の概要が論じられている。人体各部にある個々の動脈・静脈については、若干の訳語がみられるものの、詳細な言及、あるいは解剖図での図示といったことはしていない。以下に、『新靈枢』で使われた人体各部の個々の動脈・静脈に関する各訳語を列記しておく。

大動脈幹 肺動脈 上大静脈幹 下大静脈幹 肺静脈 門静脈 脾動脈 脾静脈
右腎動脈 右腎静脈

いずれも、五臓に係わる血管であり、五臓を中心にそのごく概略が論じられている。また、同書の血管系に関する記述の中には、中国伝統医学の経典『靈枢』を引用しての記述がみられ、以下にそれを示す。

第十一章 循環器解剖篇より

「循環器」 動脈深蔵於内。目不能見。静脈之浅露者。最易分別。靈枢經曰。経脈者。常不可見也。脈之見者。皆脈絡也。又曰。経脈裏。支而横者。為絡。絡之別者。為孫。此説。甚合。蓋孫脈者。毛細脈管也。絡脈者。静脈管也。経脈者。動脈管也。惟靈枢経謂。十二経脈三百六十五絡。又謂。絡脈十五。以此数目。実験之。均不相符。

『新靈枢』では『靈枢』の論じる「経脈」を「動脈」、「絡脈」を「静脈」、「孫脈」を「毛細脈管」とみなし、「十二経脈」「三百六十五絡」「絡脈十五」の数え方を否定している。しかし、それら『靈枢』のごく部分的記述のみをみて判断しており、同書で詳細に論じられる「脈」「絡」の意義を正確に捉えたものではなく、また、それまで来華医療宣教師が検討してきた artery・vein に対する中国語訳の意義を全く考慮していない¹⁷。そのように中国伝統医学の経典にみる解剖学的記述をごく部分的にとりあげて、西洋の人体解剖学と比較するという手法は、やはり日本に赴き西洋医学を学んだ余云岬（1879－1954）にもみられ、その著書『靈素商兌』（1917）では、中国伝統医学の経典『素問』『靈枢』を強烈に批判している¹⁸。

6. 小結

先述のように中西医匯通派は、中国伝統医学を主体にしながら、主に西洋の人体解剖学、あるいは生理学に着目していた。その最も主要な人物として唐宗海（1846－1897）があげられ、著書に『中西匯通医經精義』（1892）等がある。たとえば同書人身陰陽の篇には、以下の記述がある。

西医謂造化主。 惠育群黎。 所謂造化主。 即天地之神也。 与中国人本天地之中以生之義。 不謀而合。 但語言文字。 略不同耳…天地只此陰陽化生五運六氣。 人身秉此陰陽。 乃生五臟六腑

「西医謂造化主」とあるように、キリスト教伝道の意図で編訳された『全体新論』（1851）の影響が明確にみられる。そうした天地創造と人の生命に関する部分に対して、中国伝統の医家は、中国伝統医学の核心にある「運氣」、すなわち人の生命現象が「氣」の原理によるものであるとする考え方が、より優れたものであるという見方をしていたことが同書同篇の以下の記述から伺える。

人必先明天地陰陽之理。 而後知人身之氣化。 **西医剖割視驗。 人之背面前面左右内外。 層折詳矣。 而不能將各層分出陰陽。 則止知其氣。 所以剖割只能驗死屍之形。 安能見生人之氣哉**

このように中国伝統医学が陰陽説を重視するのは、その經典『素問』の生氣通天論篇第三に「夫自古通天者。 生之本。 本於陰陽」という経文があることに集約されよう。そうした考え方は、生命を失った遺体に対する執刀によって、純粹に人体構造を追求するということよりも、生きた人の身体に起こる生命現象（すなわち生理学的側面）、あるいは病機（すなわち病理学的側面）を重視するという中国伝統の流れを醸し出してきたのである。そうした大きな流れがあるからこそ、人体構造を客観的に捉えながら、それを正確に記述していくという西洋の人体解剖学の最も重要な主旨は、この段階では受容されるに至らなかったといえる。

『新靈枢』では西洋医学を主体としながら、中国伝統医学で論じられる説が部分的に取り上げられてはいる。しかしたとえば、第十三章 呼吸器解剖篇には「案素問曰…肺藏魄。 此說非是」とあるように、解剖学的内容を論じるべき篇において、肺が「魄」を蔵するといういわば生理学的内容が検証されており、同書では西洋の解剖学と生理学との区別は明確にはついていない（こうした例は他にも、第九章 消化器解剖篇、第十五章 排泄器解剖篇等でもみられる）。つまり、先の唐宗海にもみられたように、丁福保も西洋の人体解剖学を中国伝統医学の説に照

らし合わせる場面で、伝統の生理学的側面に視点がぶれていることが指摘できる。このように、西洋の人体解剖学の最も重要な主旨は、同書では明確に反映されたとはいいきれないことがわかる。

以上のように、『新靈枢』は日本経由での西洋の人体解剖学を伝えた初期の医学書ではあるが、生理学的内容および衛生学的内容を混在させたものであり、人体解剖学に関する内容もごく概略程度であり、和製解剖学用語についてもそのごく一部分が伝えられたものである。丁福保が西洋医学を中国に伝えるに当たって、人体解剖学の専門書ではなく、そうした解剖生理衛生学の概要書を著したことは、前述のように中国伝統医学の視点が背景にあったことが指摘できる。丁福保の手によって、西洋医学が最も基礎とする人体解剖学の専門レベルでの内容が伝えられるのは、『新撰解剖学講義』（1909）の刊行を待たなければならない。

【註】

¹ 『靈枢経』經水第十二に「其死可解剖而視之」とあることによる。

² 松本（2005a），p. 79–81, 87, 89–90 参照。

³ 松本，坂井（2009b），p. 490–492 参照。

⁴ 松本（2005b），p. 12–15 参照。

⁵ 丁（1925），p. 22–23 参照。

⁶ 丁（1925），p. 24–27 参照。

⁷ 丁（1925），p. 31–32 参照。

⁸ 丁（1909），緒言 p. 7–8 参照。

⁹ ここでいう「筋肉」は、西洋の解剖学概念 *muscle* に対する訳語を指すものである。中国伝統医学の経典『素問』『靈枢』においては、「筋」と「肉」とは別系統で論じられており、これらを短絡的に西洋の解剖学概念 *muscle* と同一視することは、厳密には避けなければならない。詳細は、松本（2009c），p. 49–59 参照。

¹⁰ 柯為良（1881）参照。

¹¹ Schwann T.（1839）p. 2–6 参照。

¹² 松本（2007），p. 552–555 参照。

¹³ 松本 2008b，p. 382, 388–390 参照

¹⁴ 松本（2009c），p. 59 参照。

¹⁵ 松本（2006），p. 13–14 参照。

¹⁶ 松本（2007），p. 561–562 参照。

¹⁷ 来華医療宣教師が創出してきた訳語の流れを踏まえた上で、たとえば『全体闡微』で定められた *artery* に対する訳語「脈管」、および *vein* に対する訳語「回管」をみれば、心臓を中心に血液が循環するという西洋の人体解剖学で極めて重要なハーヴェーによる血液循環説を反映したものであると同時に、中国伝統医学のいう「脈」が本来は拍動を備えたものであることから、拍動がみられない *vein* に対しては「脈」の語の使用を避けていることが伺われる。詳細は、松本（2008a），p. 59–76 参照。

¹⁸ 周 (2007), 前言 p. 2-3.

【参考文献】

Schwann T. Mikroskopische Untersuchungen über die Uebereinstimmung in der Struktur und dem Wachstum der Thiere und Pflanzen. Sander; 1839; p. 2-6.

丁福保『新内経』上海文明書局; 1908.

丁福保『新撰解剖学講義』上海医学書局; 1909.

丁福保『疇隱居士自訂年譜』無錫丁氏藏板; 1925.

柯為良『全体闡微』福州聖教医館藏板. 1881.

史崧校正『靈樞經』(『四部叢刊』明趙府居敬堂刊本影印) 上海商務印書館; 1935.

唐宗海『中西匯通医經精義』申江袖海山房; 1894.

王冰撰, 林億等校正『重廣補註黄帝内經素問』(『四部叢刊』明翻北宋本影印)上海商務印書館; 1935.

周鴻飛点校『『靈素商兌』与『群經見智錄』』学苑出版社; 2007.

松本秀士「近代解剖学への萌芽における日中比較身体論」『或問』9号; 2005a: 79-92.

松本秀士「中華文明上に組み込まれる西洋医学」『或問』10号; 2005b: 29-46.

松本秀士「人体解剖学の専門書『全体闡微』の解剖学用語について」『或問』12号; 2006: 11-24.

松本秀士「清末刊行の中国文 人体解剖学書について」『日本医史学雑誌』53卷4号. 2007: 545-568.

松本秀士「動脈・静脈の概念の初期的流入に関する日中比較研究」『或問』14号. 2008a: 59-80.

松本秀士「神経概念の初期的流入に関する日中比較研究」沈国威編『漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成』関西大学出版. 2008b: p. 373-394.

松本秀士「中国における西洋解剖学の受容——解剖学用語の変遷から」『或問』15号. 2008c: 29-44.

松本秀士「「精」の概念をめぐる西医東漸における中国解剖学用語の変遷」『或問』16号. 2009a: 27-42.

松本秀士, 坂井建雄「『全体新論』に掲載される解剖図の出典について」『日本医史学雑誌』55卷4号 2009b: 463-497.

松本秀士「西医東漸をめぐる「筋」の概念と解剖学用語の変遷」『或問』17号. 近代東西言語文化接触研究会. 2009c: 27-42.